

FLORA KANAGAWA

Aug. 11. 2007 No.65

神奈川県植物誌調査会ニュース第 65 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内

神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>

e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195



オキナグサ (相模原市 2007 年 5 月 16 日 秋山幸也 撮影). 詳しくは本文 805 ページを参照してください. .

目次

田村 淳：丹沢新産のイワハリガネワラビ	800
田村 淳：箱根にもあったアイハリガネワラビ	800
堀内 洋：『神奈川県植物誌 2001』カヤツリグサ科への補遺及びその後の新知見	801
野津信子ほか：横浜市都筑区と戸塚区の横浜市新産種およびレッドデータ植物	803
勝山輝男：藤沢市大庭のツルコウゾ	804
菅沼広美：相模原市津久井町でシノブカグマを確認	804
秋山幸也：県北部のオキナグサの生育状況について	805
秋山 守・山口勇一：東丹沢・宮ヶ瀬のヒメウラジロ観察記	805
堀内 洋：横浜市神奈川区におけるカロリナアオイゴケの採集例	806
堀内 洋：シチヘンゲ、その後	807

《800 頁へ続く》

国澤則子：コゴメカゼクサ	807
山本絢子：シロテンマ	808
事務局：2007 年度総会の報告	808
神奈川県植物誌調査会 会則	809
出版物と講座のご紹介	810
編集後記	810

丹沢新産のイワハリガネワラビ

(田村 淳)

丹沢山地新産となるイワハリガネワラビ *Thelypteris musashiensis* (Hiyama) Nakato, Sahashi & M.Kato を 2005 年に発見したので報告する。

イワハリガネワラビは日本の本州、四国と韓国に分布するヒメシダ科ヒメシダ属のシダである。神奈川県内では、これまで箱根町の神山や駒ヶ岳周辺にのみ分布が知られていた。『神奈川県植物誌 2001』ではハリガネワラビの変種扱いとしていたが、Nakato *et al.* (2004) により種に組み替えられた。

イワハリガネワラビはハリガネワラビ類の中で標高の高い地域の岩場に生育することから、箱根にあるなら丹沢にあってもおかしくないと想定していた。2004 年 9 月に秦野市内の表尾根の岩壁でイワハリガネワラビを見つけたと思っていたが、これは中池敏之博士の同定により、イワハリガネワラビとハリガネワラビの雑種のアイハリガネワラビとなった (田村, 2005)。

2005 年になって再度アイハリガネワラビの生育地に行き、アイハリガネワラビの変異を確かめようと思って複数の葉を採取した。それら全部について胞子を検鏡したわけではなかったが、確認のために中池敏之博士に再同定していただいた。その結果、アイハリガネワラビだと思った標本の中にイワハリガネワラビの標本が 1 枚あることを指摘されて、丹沢新産のイワハリガネワラビがあったと分かった次第である。生育地周辺は、アイハリガネワラビのほかウメウツギ、ウラハグサ、オオクボシダなど岩壁に特有の植物が生育していた。

本報告にあたり、標本を同定していただいた中池敏之博士と標本閲覧を許された神奈川県立生命の星・地球博物館にお礼申し上げる。

標本：秦野市秦野市表尾根 田村 淳 2005.9.12.

KPM-NA0128054

引用文献

Nakato, N., Sahashi N. & Kato. M., 2004. Cytotaxonomy of the *Thelypteris japonica* Complex (Telypteridaceae). *Acta Phytotax. Geobot.*, 55 : 89-105.

田村 淳, 2005. 丹沢大山総合調査における維管束植物グループの調査と 2004 年度の結果. *FLORA KANAGAWA*, (60): 747-749.

箱根にもあったアイハリガネワラビ

(田村 淳)

2004 年にアイハリガネワラビ *Thelypteris japonica* (Baker) Ching × *T. musashiensis* (Hiyama) Nakato, Sahashi & M.Kato を丹沢山地で採集して県新産となったが、その後の標本調査によって既に箱根産のアイハリガネワラビが多数あったので報告する。

アイハリガネワラビはハリガネワラビ *T. japonica* (Baker) Ching form. *japonica* とイワハリガネワラビ *T. musashiensis* (Hiyama) Nakato, Sahashi & M.Kato の雑種として 2004 年に新記載されたヒメシダ科のシダ植物である (Nakato *et al.*, 2004)。これまでに本州の福島県、群馬県、東京都、千葉県、長野県で分布が知られ、本州、四国、九州の広い範囲に分布する可能性が指摘されている (Nakato *et al.*, 2004)。実際に私は、静岡県愛鷹山地の鋸岳と位牌岳間 (2006.9.17 田村淳 KPM-NA0128057 ほか) の岩壁や静岡県と山梨県の県境の青笹山 (2006.10.22 山本幸子・田村淳・中西のりこ 山本所蔵) の岩と土のまざった斜面で見つけている。

私が最初にアイハリガネワラビを見たのは 2004 年 9 月で、場所は丹沢山地の表尾根であった。その際は丹沢新産のイワハリガネワラビを見つけたと思ったが、後に中池敏之博士によりアイハリガネワラビと同定された (田村, 2005)。上述のようにアイハリガネワラビは 2004 年に新記載された雑種であるため、未だ十分に各地で認識されている

わけではないだろう。『神奈川県植物誌 2001』でヒメシダ科を担当した私としても、イワハリガネワラビまたはアオハリガネワラビと同定したシダの中にアイハリガネワラビも存在している可能性があると思っていた。特にイワハリガネワラビは県内では箱根町内のみ分布していたので、箱根にもアイハリガネワラビがあるだろうと推定していた。

2006年12月に県博に行った際に、イワハリガネワラビとアオハリガネワラビの標本から胞子を採取して検鏡したところ、胞子が異常のものが数枚あった。また、胞子が成熟していないがアイハリガネワラビのように思える標本もあった。これらの標本について中池敏之博士に確認のため同定していただいたところ、6枚はアイハリガネワラビであるとのことだった。他のものは雑種の可能性があるが、胞子を見るには採集した時期が早かったため、判定保留となった。

アイハリガネワラビとその両親種であるハリガネワラビ、イワハリガネワラビの特徴を Nakato *et al.* (2004) を参照して記録すると表のようになる。『神奈川県植物誌 2001』においてイワハリガネワラビの特徴として記載した「胞膜には毛が無いが、あっても少ない」というのは決め手にならないようである。しかし、Nakato *et al.* (2004) が区別点とした葉軸裏側（背軸側）の毛の有無については、県博所蔵のハリガネワラビとイワハリガネワラビの標本で確認したところ、微妙な標本があったのも事実である。これらについては多数の標本を比較する過程で検討してみたい。

表 ハリガネワラビ・イワハリガネワラビ・アイハリガネワラビの特徴。

	倍数性	生育環境	葉柄の色	羽片の縁毛	葉軸の背軸側の毛	胞子の表面	包膜の毛
ハリガネワラビ	4倍体	林床	栗色（品種のアオハリガネワラビはわら色）	0.20～0.40mm	あり	膜質状	あり
イワハリガネワラビ	2倍体	岩上	わら色（基部は栗色が普通）	0.10～0.20mm	なし	針状	あり（低密度）、稀になし
アイハリガネワラビ	3倍体	岩上、岩交じり斜面	わら色（基部は栗色）	0.19～0.35mm	あり	膜質状と針状が混在	あり

『神奈川県植物誌 2001』カヤツリゲサ科への補遺及びその後の新知見 (堀内 洋)

1. イヌホタルイの国内の分布域

標記については執筆時に確認がとれず、『神

アイハリガネワラビは、一見したところイワハリガネワラビに酷似しているが、決め手は胞子が異常な点である。Nakato *et al.* (2004) が指摘しているように、アイハリガネワラビは今後も各地で発見されるだろう。林床以外に生育するハリガネワラビ類で葉柄がわら色のものがあつたら、要注意である。

なお、イワハリガネワラビとアオハリガネワラビ *T. japonica* (Baker) Ching form. *formosa* (C.Chr.) Nakato, Sahashi and M.Kato の学名は Nakato *et al.* (2004) により組み替えられたので、『神奈川県植物誌 2001』におけるこれらの学名を本文中のように訂正する必要がある。

最後に、標本を同定していただいた中池敏之博士と、標本の閲覧と貸し出しを許された勝山輝男氏にお礼申し上げる。

標本：箱根町冠ヶ岳 勝山輝男 1983.9.4. KPM-NA1055664 ほか。

引用文献

- Nakato, N., Sahashi N. & Kato. M., 2004. Cytotaxonomy of the *Thelypteris japonica* Complex (Telypteridaceae). *Acta Phytotax. Geobot.*, 55: 89-105.
- 田村 淳, 2001. ヒメシダ科. 神奈川県植物誌調査会(編), 神奈川県植物誌 2001. pp.105-112. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 田村 淳, 2005. 丹沢大山総合調査における維管束植物グループの調査と 2004 年度の結果. *FLORA KANAGAWA*, (60): 747-749.

奈川県植物誌 2001』(以下、植物誌)では「北海道?」と北海道の分布に疑問符を付した。2005年に北海道で本種を採集したので疑問符を削除する。採集したのは水田地帯の人為の加わった小さな裸地気味の湿地で、その他のカヤ

ツリグサ科植物としてタマガヤツリやハリイが生えていた。北海道へは稲作とともに伝播した可能性もあると思う。

標本：北海道勇払郡鶴川町春一。一区地先 鶴川右岸水田地帯 2005.9.3. 堀内洋 no.9700.

2. イヌホタルイとカンガレイとの雑種の産地

標記雑種と同定された区名のない横浜市永田産の標本を地図等から南区と判断し、堀内(2003, 2004)で発表した。このことについて、当該標本(YCM022147)の採集者である長谷川義人先生より、産地は南区で正しく、同じ標本は大井先生により「シカクホタルイ *Scirpus juncooides* Roxb. var. *triangulatus* Ohwi」と同定されたとの御教示を賜った。産地の問題が解決したのみならず、当時の大井先生の貴重な御見解を知ることが出来た。ここに報告するとともに、長谷川先生に御礼申し上げる。

標本：横浜市南区永田 1956.9.2. 長谷川義人 YCM022147.

3. イソヤマテンツキの学名

植物誌ではイソヤマテンツキの学名を *Fimbristylis ferruginea* (L.) Vahl var. *sieboldii* (Miq.) Ohwi とした。母種とした *F. ferruginea* (L.) Vahl の元となる *Scirpus ferruginea* L. はジャマイカの海岸沼沢地の植物“Habitat in Jamaicae paludibus maritimis”をもとに記載されている。D.S. & H.B. Correll (1982) のバハマ諸島産の *F. ferruginea* の記載や図と日本産のイソヤマテンツキを比較してみると以下のように異なっていた。文献を調べたところ、既に Koyama (1961) がジャマイカ産の *F. ferruginea* の標本と日本のイソヤマテンツキを比較してその違いについて述べるとともに、両者を別種としイソヤマテンツキに *F. Sieboldii* Miq. ex Franch. et Sav. の学名をあてる見解を示していた。また、Walker (1976) も、熱帯アメリカの *F. ferruginea* がアジアの植物に比べ、より白っぽい瘦果、密に毛のある小穂鱗片、より短めな小穂を持つことで区別できるとして、琉球列島を含む日本及び朝鮮半島南部の植物に *F. sieboldii* Miq. ex Franch. et Sav. の学名をあてている。従って、植物誌のイソヤマテンツキの学名を“*Fimbristylis sieboldii* Miq. ex Franch. et Sav.”とし、本文中の説明「基本変種はアジア、アフリカ、オーストラリアの亜熱帯に広く分布している。」を削除する。

なお、Kukkonen (1998) は *F. ferruginea* 及び近縁分類群が全世界の熱帯に分布しているため今後の研究が必要としており、日本産のイソヤマテンツキの学名が将来変更される可能性も否定できない。

[イソヤマテンツキと D.S. & H.B. Correll (1982)

の *F. ferruginea* との比較]

草丈：イソヤマテンツキは 40cm 程度、*F. ferruginea* は 80cm に達する

花序：両者とも花序は花茎の先に頂生するが、イソヤマテンツキは最長の苞葉がしばしば花序より明らかに長く直立気味につき花序はやや偽側生状に見える、*F. ferruginea* は最長の苞葉が花序と同長前後で直立し花序は頂生状に見える

葯の長さ：イソヤマテンツキは 0.7-1mm、*F. ferruginea* は 2mm 弱

小穂の形状：イソヤマテンツキは狭卵形体で先端が鋭頭、*F. ferruginea* は広卵形体で先端が鈍頭
付記：神奈川県立生命の星・地球博物館で標本を拝見していたところ、草丈は 35-40cm 程であるが、花序や小穂の形状が D.S. & H.B. Correll (1982) の *F. ferruginea* の図に近い印象を受ける下記の標本があった。調べたところ小穂は黒穂病に冒され瘦果が出来ていなかった。

標本：鹿児島県川辺郡坊津(塩ヶ浦)

1988.8.28. 小崎昭則 KPM-NA0072895.

4. コアゼテンツキの産地

アゼテンツキと同定されていた 1956 年. に採集されたコアゼテンツキの標本 2 点を見いだした。産地の記載が若干異なるが採集年月日が同じなので同一地域で採集されたものと考えられる。全く同じ場所か不明であるが、1999 年に相模原市鹿沼台二丁目の公園内で採集された標本もある (SCM13364, YCM34387 及び KPM-NA0119607)。コアゼテンツキは滅多に見られる植物ではないが、同一地域で約 40 年ぶりに採集されており、本種の分布や生態を考える上で興味深い。

標本：相模原(大野：鹿沼) 1956.9.23. 桐生亮 no.748 SCM00748；相模原(鹿沼), 1956.9.23. 桐生亮 no.750 SCM00750；相模原市鹿沼台二丁目 1999.9.4. 菅沢桂子 SCM13364 & YCM 34387；相模原市鹿沼台二丁目(鹿沼公園内) 1999.9.11. 菅沢桂子 KPM-NA0119607.

神奈川県立生命の星・地球博物館，相模原市立博物館の皆様には標本閲覧でお世話になりました。長谷川義人先生には貴重な情報をご提供して頂きました。お礼申し上げます。

引用文献

- Correll, D.S & Correll, H.B., 1982. Flora of the Bahama Archipelago. 1692pp. Gantner, Liechtenstein.
- 堀内 洋, 2003. ホタルイ属. 高橋秀男・勝山輝男・田中徳久(監修), 横浜の植物. pp. 406-417. 横浜植物会, 横浜.
- 堀内 洋, 2004. 神奈川県植物誌 2001 の補遺, 正誤及びその後の新知見. *FLORA KANAGAWA*, (58): 719-721.
- Koyama, T., 1961. Classification of the Family Cyperaceae (1). *J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. 3, Bot.* 8: 37-148.
- Kukkonen, I., 1998. Flora Iranica No. 173 Cyperaceae. 307pp.+42tabs. Akademische Druck, Austria.
- Walker, E.H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. iv+1159pp. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.

横浜市都筑区と戸塚区の横浜市新産種およびレッドデータ植物

(野津信子・和田良子・佐々木シゲ子・
埜村恵美子)

2005年4月から2007年6月にかけて，横浜市都筑区と戸塚区を重点的に踏査した。その結果以下の横浜市の新産種およびレッドデータ植物を確認したので報告する。横浜市の新産種は『神植誌 01』（神奈川県植物誌調査会編，2001）より判断し，レッドデータ植物は、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書』所載の「維管束植物」（勝山ほか編，2006）により，学名の後の〔 〕内にカテゴリーを記した。なお，標本のデータは，採集場所，採集年月日，標本番号（KPM-NAは県立生命の星・地球博物館，YCBは横浜市こども植物園を示す）の順に記述した。

ピロードシダ *Pyrrosia linearifolia* (Hook.) Ching
横浜市新産

標本：都筑区池辺町（龍雲寺の庭の古木（オオバボダイジュ）の幹に着生）2006.2.25

YCB429361

ミズニラ *Isoetes japonica* A.Braun [I B 類]

標本：戸塚区舞岡公園 2006.9.27 YCB429424.

ミズワラビ *Ceratopteris thalictroides* (L.)
Brongn. [準絶滅危惧種]

標本：都筑区川向町 2005.10.16 YCB428586.

ミズオオバコ *Ottelia alismoides* (L.) Pers. 横浜市新産 [I B 類]

標本：戸塚区舞岡公園 2006.9.27 YCB429425.

ヒメコウガイゼキショウ *Juncus bufonius* L. 横浜市新産 [I A 類]

標本：戸塚区柏尾川 2007.5.8 KPM-NA0128469 ;
2007.5.19 KPM-NA0128473 ; 2007.6.6 KPM-NA0128472.

チャボウシノシツペイ *Eremochloa ophiuroides*
(Munro) Hack. (帰化植物) 横浜市新産

標本：都筑区川向町 2006.10.22 YCB429400.

クサスゲ *Carex rugata* Ohwi 横浜市新産

標本：都筑区都筑中央公園 2005.4.20
YCB428495 ; 2005.5.18 YCB428514.

タマツリスゲ *Carex filipes* Franch. & Sav. 横浜市新産

標本：都筑区茅ヶ崎公園 2006.4.26 YCB429315.

ミクリ *Sparganium erectum* L. [II 類]

標本：都筑区茅ヶ崎公園（せせらぎ）
2005.6.27 YCB428532.

オオツクバネガシ *Quercus* × *takaoyamensis*
Makino 横浜市新産

標本：都筑区東方町 2006.3.5 YCB429357.

アズマツメクサ *Tillaea aquatica* L. 横浜市新産
[I A 類]

標本：都筑区川向町休耕田 2006.6.13



ヒメコウガイゼキショウ（戸塚区柏尾川 2007年6月6日 佐々木シゲ子撮影）。

YCB429337 ; 2006.7.1 YCB429339.

ミズキンバイ *Ludwigia peploides* (Kunth)
P.H.Raven subsp. *stipulacea* (Ohwi) P.H.Raven
[I B 類]

標本 : 戸塚区柏尾川 2006.7.1 YCB429373.

ヤブムグラ *Galium niewerthii* Franch. & Sav. [II
類]

標本 : 戸塚区ウイトリッヒの森 2006.10.16
YCB429437.

ヤマクマバナ? *Clinopodium chinense*
(Bench.) O. Kuntze var. *shibetchense* Koidz. 横
浜市新産

丹沢でも同様のものが採集され、中国産の類
似種との比較検討が必要とされている (勝山ほ
か, 2007).

標本 : 都筑区茅ヶ崎公園 2006.6.13 YCB429321 ;
2006.6.13 KPM-NA128542 ; 2006.7.1 KPM-
NA128543.

ヒロハズメトウガラシ *Lindernia antipoda* (L.)
Alston var. *verbenifolia* (Colsm.) Ohba 横浜市
新産

標本 : 都筑区川向町 2005.10.16 YCB428575.

マツバハルシャギク *Helenium tenuifolium* Nutt.
(帰化植物) 横浜市新産

標本 : 戸塚区柏尾川 2006.7.9 KPM-NA128544.

引用文献

勝山輝男・田村 淳・田中徳久, 2007. 維管束
植物. 丹沢大山総合調査実行委員会編, 丹
沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植
物目録. pp.1-44. (財) 平岡環境科学研究
所, 相模原.

勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植
物調査会, 2006. 維管束植物. 神奈川県レ
ッドデータ生物調査報告書 2006. pp.37-130.
神奈川県生命の星・地球博物館, 小田原.
神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物
誌調査会 2001. 1580pp. 神奈川県立生命の
星・地球博物館, 小田原.

藤沢市大庭のツルコウゾ

(勝山輝男)

ツルコウゾ *Broussonetia kaempferi* Siebold は
本州 (山口県), 四国, 九州に分布するクワ科
の雌雄異株の落葉藤本で, 県内には記録がな

かった. どのような経緯で持ち込まれたのかは不
明であるが, 藤沢市大庭の団地の土手や街路
の植込みに, 約 100m にわたって生えている.
浅野牧子さんが見つけれ, 2007 年 4 月 14 日
に現地を案内していただき, 生育状況を観察し,
写真を撮影した. はじめ, 雄株ばかりが目につ
いたので, 1 個体から繁殖したクローン集団かとも
思ったが, よく探すと雌株もあり, 種子繁殖し
ている可能性が高い.

標本 : 雄株 藤沢市大庭 2007.4.13 浅野牧子・
寺井京子 KPM-NA0128632 ; 雌株 2007.4.14
勝山輝男・浅野牧子・寺井京子 KPM-
NA0128633.



ツルコウゾ. 左 : 雄株, 右 : 雌株 (藤沢市大庭 2007
年 4 月 14 日 勝山輝男撮影).

相模原市津久井町でシノブカグマを 確認

(菅沼広美)

相模原市津久井町でシノブカグマ
Arachnoides mutica (Franch. & Sav.) Ohwi を
確認しましたので, 報告いたします.

2007 年 1 月 28 日, 家族の者と津久井町長竹
方面に出かけた折, スギ植栽林内に 40 ~ 50cm
ほどのリョウメンシダに似たシダがあり近づきまし
た. リョウメンシダよりも葉質は固くソーラスも葉身
の上部から付き, 葉柄基部の鱗片は茶褐色, 葉
柄上部, 中軸, 羽軸は黒くて細く光沢がある鱗片.
家に持ち帰り調べるとシノブカグマに似ています.
『神植誌 01』には, 「北海道, 本州, 四国, 屋
久島, 朝鮮, ロシア東部に分布. プナ帯上部か
らシラビソ帯に生え, シラビソ帯の代表種のひと
つ. 基準標本の産地は横須賀付近」とあり, 丹

沢での報告と標本：秦野市大倉 1988.4.14 山口育子 HCM38101. 横浜市緑区新治町 1944.6.26. 山田文雄 KPM-NA1105995. 津久井町蛭ヶ岳 1960.11.4. 大谷茂 YCM8112 が引用されています。

シノブカグマの自生地の状況は、樹高 8～10m、胸高直径 20cm 強の比較的明るいスギ植林内の北西斜面下部。斜面中部から上部にはアズマネザサ、アオキ、ヒサカキ、ツルグミ等の低木もありますが、下部から中部斜面の林床はシダ類が優占し、低木層は未発達。その他オシダ (1 株)、フジオシダ (少)、ホンバナライシダ、オニカナワラビ (1 株)、サイゴクベニシダ (1 株)、トウゴクベニシダ、オオベニシダ、ベニシダ、オクマワラビ、クマワラビ、ヤマイタチシダ、オオイタチシダ、イワガネソウ、トウゲシバ、ヤマヤブソテツ、テリハヤブソテツ、イノデ、アイアスカイノデ、ドウリョウイノデ、ツヤナシイノデ、イノデモドキ。後日自生地に出かけもう 1 株確認できました。相模原市の合併により新市域の植物調査に昨年 9 月から参加し、冬のスギ植林内等のシダ観察の楽しみを知りました。

標本提出に際し、自生地に同行して頂きました相模原市立博物館の秋山幸也学芸員、同定をお願い致しました宮崎卓氏にお礼申し上げます。また常日頃、標本作成等のご指導して下さる菅澤佳子氏に感謝致します。

標本：相模原市長竹 (TS-5) 2007.1.28 菅沼 広美 SCM25234.

県北部のオキナグサの生育状況について

(秋山幸也)

相模原市立博物館では現在、同館資料調査員の宮崎卓さんを中心として、合併した新市域 (旧津久井四町) の植物相調査を進めている。その中で、対象地域におけるオキナグサ *Pulsatilla cernua* (Thunb.) Bercht. & Opiz. の生育状況を確認したので報告する。

オキナグサは、いわゆる山野草として有名な種が多いキンポウゲ科のなかでも、玄人好みのするその咲き姿から、スター級の人気と言っても過言ではない。生育立地は、遷移の初期段階にある明るい草原や砂礫地であり、人為、自然ともに攪乱が起きやすい不安定な立地である。このよう

な条件が災いし、既知の産地の多くが開発行為や盗掘圧などから絶滅、あるいは近年の確認が途絶えた状態である。国 RDB では絶滅危惧 II 類、県では絶滅危惧 I A 類である。神奈川県レッドデータ生物調査報告書 (2006) によると、『神植誌 88』及び『神植誌 01』の調査による既知の産地は 5 地点である。このうち、仙石原では消滅、丹沢の 2 ヶ所では 1995 年以後確認できていない。

今回、相模原植物調査会では、県レッドデータ生物調査報告書 (1995) の調査によって確認された県北部の地点について、県立生命の星・地球博物館の勝山さんと、当時、調査に同行した宮崎さんの記憶を頼りに踏査を行った。調査地点については、本種の減少原因を考慮して明記せず、旧津久井郡域という表記にとどめる。

調査は 2007 年 5 月 16 日に実施した。急峻な谷地形の中を注意深く進むと、地元 (相模原市相模湖町) の会員である三樹和博さんが、瘦果をつけた株を発見した。30m ほどの範囲に 10 株程度が散生していたが、近隣の類似の立地を探したものの、他には発見できなかった。この場所は、通常は人がほとんど入らないが、決して安定した立地とは言えない。極めて脆弱な立地にかろうじて残っているというのが正直な印象である。標本として葉のみ採集し、相模原市立博物館に収蔵した。

新市域にはオキナグサをはじめ、絶滅が危惧される種が数多く確認されている。さらに調査を進める中で、今回別に菅沼さんから報告のあったシノブカグマのように、新しく確認された種や産地も次々と挙げられている。これらについては、節目節目でできる限り報告していきたいと考えている。

標本：相模原市 2007.5.16 宮崎卓 SCM26636.

東丹沢・宮ヶ瀬のヒメウラジロ観察記

(秋山 守・山口勇一)

ホウライシダ科のヒメウラジロ *Cheilanthes argentea* は本州東北地方 (岩手県だけに分布) 以南の日当たりがよく、水はけなどのよい限られた山地の岩場や路傍の石垣などに自生する常緑性の小型のシダである。環境庁のレッドデータブック (2000) によると国カテゴリーでは絶滅危



落石防止用の金網から生えるヒメウラジロ（清川村宮が瀬林道 2006 年 12 月 16 日 秋山 守撮影）。

惧Ⅱ類（UV）として評価され、神奈川県レッドデータ生物調査報告書（2006）では絶滅危惧ⅠB類（EN）にランクされている貴重種である。神奈川県下に現存する自生地は藤野 -1、清川 -2、清川 -3、城山の 4ヶ所のみで、松田町の自生地は道路改修によって消滅している。

清川村宮ヶ瀬の林道の崖地でヒメウラジロを最初に発見したのは高橋秀男先生である。『植植誌 88』作成のためのブロック別調査（1980. 5. 11）の折り、親株 1 個体を見出したのである。筆者の一人山口勇一は 1999 年 10 月 10 日、札掛から愛川町への帰路、ヒメウラジロの群落に気付き、後日、訪れて調べたところ親株 540 個体と幼株多数生育していることを確認した。最初の発見から 19 年目の成果である。山口勇一・秋山 守は 1999 年より 7 年経過した 2006 年 12 月 16 日に自生地の様子と生育状況を再度確認のため訪れた結果、親株 1500 個体を積算し、幼株 500 個体以上を確かめ、加算すると 2000 個体以上の増殖を記録した。生育している現場は林道の北側に位置し、崩壊しやすい地形であり、1980 年の発見当時、崖崩れ防止のためのコンクリート吹き付け工法により表面がコンクリートにより覆われ、一部の割れ目に親株 1 個体が生育していた。今回訪れた際には以前の面影はなく、コンクリート壁は崩壊し、断崖の左右は新たに崖崩れ防止のコンクリート枠で仕切られ、コ

ンクリート枠の左右の間は落岩、落石防止用の金網が張られていた。路面から高さ約 3m、長さ 25 m の傾斜面の岩の割れ目・すきま・くぼみにコンクリートや岩盤が風化してくずれた土砂や落ち葉などが堆積した立地条件のきびしい場所に優占種としてヒメウラジロがへばりつくように生え、大きな群落が形成されている。群落内にはハコネシダ、ヤマイタチシダ、オクマワラビ、クマワラビ、ヤブソテツ、ヒメワラビ、オオバノイノモトソウ、イワデンダ、コバノヒノキシダ、イトラノオ、リュウノウギク、フキ、ノアザミなどが僅かに点在している。高さ約 3m 以上の傾斜地の上部にはハナイカダ、ヤマブキ、クサギ、ニワトコ、ツクバネウツギ、シバヤナギ、キブシなどの落葉低木が覆い被さるように生え、春から秋にかけて日陰になるためか生育していないし、隣接するよく似た環境条件の場所には一株も分布していないのは不思議である。ヒメウラジロが生えている自生地は日照、水分、土壌などが好条件の微環境をつくり、生育に適したよい生態系が保たれているためだろうか。現在も幼株数からみて着実に増殖を繰り返している。これからも自生区域の保護・保全が長く続くよう見守っていきたい。

参考文献

- 高橋秀男・山口勇一、2000. 宮ヶ瀬のヒメウラジロとナタネタビラコ. *FLORA KANAGAWA*, (49): 573.
- 環境庁編、2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物. レッドデータブック 8 植物 I（維管束植物）2000. 660pp. 財団法人自然環境研究センター、東京.
- 勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物調査会、2006. 維管束植物. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. pp.37-130. 神奈川県生命の星・地球博物館、小田原.

横浜市神奈川区におけるカロリナアオイゴケの採集例

（堀内 洋）

2006 年 6 月、JR 横浜線大口駅西口広場前の県道 111 号線沿いでアイオイゴケ属植物を採集した。車道際の集水口付近にたまった浅い土壌に生えていた。縁石を挟んで車道に付帯する歩道側の縁石とアスファルトの隙間からも生えてい

た。2007年2月現在、付近で確認しているのはこの2つだけである。

日本にはアオイゴケ *Dichondra repens* Forst. var. *repens* が自生するほか、栽培品の北米産の変種カロリナアオイゴケ var. *carolinensis* Choisy. が逸出・帰化するとされる。大場 (2003) によればアオイゴケの自然分布は千葉県以西とされるが、千葉県内での分布は房総半島南端に限られているようで、横浜市内に自然分布があるとは考えづらい。また、今のところ採集地点周辺でアオイゴケ属植物の栽培を確認できない。車道沿いなので或いは車に付着してきたのかもしれない。

大場 (2003) によれば、アオイゴケの葉は腎円形で中央部が最も幅が広く、先端はやや凹頭であるのに対し、カロリナアオイゴケの葉は卵円形で中央より下が最も幅が広く、先端は平円頭であることで区別できるとされる。標本の葉の多くはカロリナアオイゴケの葉形に該当するよう思われた。筆者はアオイゴケ属に不案内なため、やや疑問が残るがここではカロリナアオイゴケとして報告する。標本は神奈川県立生命の星・地球博物館に収めた。

標本：横浜市神奈川区大口通 JR 横浜線大口駅西口広場前 2006.6.10. つぼみ～未熟な果実 堀内 洋 no.9963.KPM-NA0128629.

引用文献

大場達之, 2003. ヒルガオ科. 財団法人千葉県史料研究財団編集, 千葉県の自然誌 別編 4, 千葉県植物誌. pp.469471 & 478-481. 千葉県, 千葉市.

シチヘンゲ, その後

(堀内 洋)

FLORA KANAGAWA(60) で横浜市神奈川区のシチヘンゲ *Lantana camara* L. について報告した。路傍に逸出したと推定した株は2005年秋に地上部が切り取られたが、株元より新しい枝を出し、葉をつけたまま越冬した。2006年5月3日の観察では、長いもので20～30cm程の枝が20本ほど出ていた。その後、2006年8月には植物体が引き抜かれているのを確認した。2007年2月3日現在、地上部が見い出されないことから、この個体は消失したと思われる。

庭に栽培されていた株は2005年の秋以降、寒

くなるにつれ勢いが弱くなり、傷んだ葉もあったが、花や果実をつけたまま落葉もせず年を越した。その後、2006年1月に短く刈り込まれたが、2007年2月3日の観察では、葉が赤紫色に着色し花や実をつけているのを確認した。

刈り取りによる影響は不明であるが、どちらの株も近年になく冷え込んだ2005年から2006年にかけての冬の寒さにも枯死することなく生存したことが確認出来たことから、当該地域では十分野外で越冬出来るものと判断され、今後も逸出してゆく可能性があるものと思われる。

2007年2月11日、神奈川県立生命の星・地球博物館でシチヘンゲのジーナスカバーを拝見したところ、栽培品と明記された沖永良部島産の標本 (KPM-NA0024297) を除く下記の標本を見いだしたが、神奈川県内で採集された標本は見いだせなかった。なお、FLORA KANAGAWA (60) で示した標本は、神奈川県立生命の星・地球博物館に寄贈した (KPM-NA0124865)。

標本：静岡県清水市三保 (現在の静岡市清水三保) 清水港付近 alt. ca.2m 1999.6.20. 近田文弘 no.19255 KPM-NA0119759; 東京都小笠原支庁南鳥島 (マーカス島) 1987.2.5. 長谷川義人 KPM-NA0076843; 小笠原父島瀬戸の見晴～夜明山～中央山東平～初寝山 1978.5.21. 高橋秀男 KPM-NA0092377.

コゴメカゼクサ

(国澤則子)

9月に入ったある日、家の近くの道沿いで見慣れないイネ科の植物があったので採集した。スズメガヤ属のものと思われた。3、4株あった中で一番育っていたものを採集したが、それもまだ伸び切っておらず、1～2小花しか見えなかったため、もう少し日をおいて良い状態のものを採集することにした。

ところがそこはほとんど休耕中の・・・申し訳程度に一部に野菜が植えられている・・・畑の端の通路の部分で、それほど草が繁っていた様子でもないのに、除草剤を使用したらしい形跡があり、目的の植物も萎れてしまっていた。もう無理かなと思いつつ、次にその道を通ったときに目をやると立派に成長した株があった。10月初旬のことであるが、薬害を免れた小さな株が2～3週間

で成長したものでしょうか。

全長 40 cm, 狭い円錐花序で直立, 多数の枝を出し, さらに小枝に小さな小穂を蜜につけている。小穂は長さ 2mm 程, 幅 1mm 強, 3~7 小花からなり, 淡緑色から紅紫色をしている。

生命の星・地球博物館の勝山先生に見ていただき, コゴメカゼクサと同定していただいた。神奈川県レッドデータ植物として報告されている種であるところから, 今回の採集を報告します。

標本: 秦野市南矢名 2006.9.8. KPM-NA0128547; 2006.10.2. KPM-NA0128546.

シロテンマ

(山本絢子)

2006 年 7 月 31 日, オニノヤガラ属のシロテンマが姥子から大涌谷へのコース途中のスズダケの根元に一本生えていました。この日, オニノヤガラを観察してきたボランティア仲間の M 氏が話されました。私は今まで箱根では一度もオニノヤガラを見たことがありませんでしたので, もしかしてシロテンマではないかと疑いました。茎の高さや色など質問をしました。茎は 30~40cm, 色は白とこのことで, ますますシロテンマだと思いました。「見てみないとはっきりわからないけれど多分シロテンマですよ。」と言ってしまいました。そんな事がありその日の夕方, 案内をしていただき思



シロテンマ (箱根町姥子 2006 年 7 月 31 日 山本絢子撮影)。

いがけず見てくることができました。以前から箱根や丹沢に稀に生えると『神植誌 01』にも記載されており, いつか出会えることを願っていましたので嬉しかったです。

なお, オニノヤガラは地元でも時々観察しますし, 中井町の雑木林では, 以前アオテンマも見えています。アオテンマに偶然出会えたときも嬉しかった記憶があったので, 何度か探しに行きましたが今は開発されて見られなくなりました。

2007 年度総会の報告

(事務局)

● 2006 年度 事業報告

● 2006 年度 決算報告・監査報告

● 2007 年度 予算

●各ブロックの活動報告

●会則の改正

● 2007 年度 運営体制

● 2007 年度 事業計画

神奈川県植物誌調査会 会則

・ 本会は神奈川県およびその隣接地域の植物相

を調査し、その成果を刊行することを目的とする。

- ・本会は神奈川県植物誌調査会といい、事務局を神奈川県立生命の星・地球博物館（小田原市入生田499）内におく。
- ・本会の目的に賛同し、会費（年額2,000円）を納入するものをもって会員とする。
- ・本会は、その目的を達成するために次の事業を行なう。
 1. 別に定めるブロックごとの具体的な植物相調査、標本の収集・集積などの活動
 2. 会報の発行、諸成果の刊行[※]
 3. 植物に関する研究会、観察会、講演会等の開催[※] ※順序の入れ替え
 4. その他役員会で必要と認める事業
- ・会の運営にあたり次の役員をおく。任期は2年とするが、再任は妨げない。

代表1名、運営委員（10～20名程度）、ブロック事務局員若干名、事務局員（庶務・会計）若干名、会計監事（2名）。
- ・本会は役員の方議によって運営する。事業目的によっては特別委員会をおくことが出来る。
- ・役員を選出、会則の改正は総会の承認を得て決定する。
- ・総会は年一回開催する。

付則

本会は1979年より1988年「神奈川県植物誌1988」刊行までを第一期とし、1989年より2001年「神奈川県植物誌2001」刊行までを第二期、それ以降を第三期とする。

会則は 1979年1月27日より実施する。

1989年4月8日改正

2007年4月21日改正

〈今回の主な改正点（上記の下線部ほか）〉

- ・事務局を移動し、ブロックの位置づけを明確化
- ・会費を付則から移動
- ・役員について
顧問を削除
地区委員（ブロック代表）をブロック事務局員の名称で復活
- ・本会の歴史的経緯に三期を追加

出版物と講座のご紹介

『小原敬先生著作集』

会員の皆様には4月の総会時にお渡し（ある

いは終了後に送付）しましたが、長く会のご指導をいただき、運営委員もお願いしている小原敬先生の著作集を刊行しました。編集作業では、浜口哲一さん、長谷川義人さん、三輪徳子さんほかの皆さんにたいへんお世話になり、事務局からも感謝いたします。著作集は、一部1,500円（送料別）で頒布していますので、事務局までご一報ください（たいへん好評で、すでに10部ほどの残部があるのみですが・・・）。

『丹沢大山総合調査学術報告書』

2005年から2006年にかけて実施された丹沢大山総合調査の報告書が刊行されます。この調査には、調査会でも有志を募り、維管束植物の調査に協力しました。本編800頁、目録編472頁にCD-ROMが付いている大作です。発行の（財）平岡環境科学研究所のHP（<http://hiraokaken.or.jp/>）に詳細があり、販売（一部8800円）もしています。ぜひ購入ください。

講座「帰化植物、最近の話題」

生命の星・地球博物館では連続講座「帰化植物、最近の話題」を9月8日（土）、10月20日（土）、28日（日）、11月17日（土）の4回にわたり開催します（受講料5,000円）。詳しくは博物館企画普及課までお問い合わせください。

（田中徳久）

編集後記

長く事務局員の一翼を担っていただいていた木場英久氏が、この3月で生命の星・地球博物館を退職され、桜美林大学の准教授として着任されました。そんなわけで、これまで木場氏が主体となって大部分の作業をやっていたFLORA KANAGAWAの編集作業は、残された事務局員が今号より引き継ぐことになりました。不行届な面も多々あることと思いますが、よろしく願います。

木場氏は「来年度はこの法則を打破して3号をお届けしたい」（前号の編集後記）と想っていたようですが、何はともあれ、「今年度は2号」を当面の目標に頑張りたいと思います。原稿をお待ちしております。それはともかく、木場氏の新天地でのますますのご活躍をお祈りいたします。…と言っても勤務地はすぐ隣の町田市です。調査会の運営委員も引き続き引き受けていただいているのですが・・・。（田中徳久）